アセスメントを活用し、学校全体の教育力向上を図る方法とは？

福岡県にある麻生リハビリテーション大学校では、（株）進研アドが提供する専門学校向けのアセスメント「基礎力リサーチ」*を実施し、入学以降の学生の成長を追跡しています。今回は、１年生の４月と10月に調査を行い、当時の学習時間や授業への満足度、学習意欲や学び方の面で態度に変容（ポジティブ・ネガティブの両面）が見られた学生９名がその後どのように成長しているのか、インタビュー調査を行いました。学生一人ひとりの成長を可視化するだけでなく、学習に効果的な授業のポイントや課題を環境要因・本人要因に区別して明らかにし、学校全体の教育の質向上に生かそうとしています。

学校法人麻生塾
麻生リハビリテーション大学校

福岡県に専門学校 13 校、高等部１校を擁する麻生専門学校グループの１つ。2001 年に麻生リハビリテーション専門学校として開校後、2012 年に現学校名に変更。理学療法士・作業療法士・言語聴覚士の国家資格取得を目指した専門教育を行う。卒業生は、県内外の病院、リハビリテーション施設、福祉施設などで活躍。

設立 2001（平成 13）年　形態　理学療法学科、作業療法学科（ともに昼間部３年課程、夜間部４年課程）、言語聴覚学科（昼間部３年課程、昼夜間部２年課程）
住所 〒812-0007 福岡県福岡市博多区東比恵 3-2-1　電話 092-436-6606
Web http://www.asojuku.ac.jp/arc/

研究概要

◎研究の流れ

❶ 2018 年４月と10月に、麻生リハビリテーション大学校の１年生（３学部の昼・夜間部合わせて約 200 名）を対象に（株）進研アドが提供するアセスメント「基礎力リサーチ」を実施。２回のテスト結果を比較し、学習時間、学習意欲･授業満足度、成績が伸びた学生９名を抽出。

❷ １年生の時に顕著な態度変容が見られた学生９名が、その後どのように成長しているのか、個別にインタビュー調査を実施。質問項目は、①入学前～現在に至るまでの自己の成長、学習・学習外の意欲の変化とそのきっかけ、②自分の成長につながった、つながらなかったと感じる授業や指導（**環境要因**）、③授業以外の学びや学習習慣（**本人要因**）、④後輩に勧めたいことの４項目。さらに、同校への進学を決めてから現時点までの意欲の変化を表す「意欲曲線」を書いてもらった。

❸ ❷のインタビュー調査で、学生から授業について特に評価が高かった３名の専任教員に、校長代行を加え、❶❷を通して明らかになった学生の学習や成長の実態を基に、学校として、今後どのように教育・指導改善を行っていくべきかを議論してもらった。

＊「基礎力リサーチ」　主に新入生を対象に、学生一人ひとりの入学時の学力や職業準備意識の把握、並びに入学者全体の傾向把握を目的とした、専門学校向けのアセスメント。「基礎力確認テスト」と「学習・職業基礎意識（アンケート）」から成る。受検者個別の帳票と復習用教材、受検者全体の集計結果・分析が送付される。面談などの個別の指導資料として活用できるほか、結果分析によって、指導改善にも活用できる。詳細は、http://shinken-ad.co.jp/service/solution4-2.html

座談会

学生をよき職業人として育てるため 教員が指導改善をしやすい環境づくりを

学生に感じている課題と指導の工夫①

仕事には何が求められるかを 1年生でイメージさせる

――今回は、１年生から成長を追跡してきた2年生にインタビュー調査を行いました。普段、先生方が学生と接していて感じるよい点や課題には、どのようなものがありますか。

老川　本校には、授業や課題に一生懸命取り組もうとする学生が多くいます。ただ、１年生では学習の仕方をまだつかめていないため、成果が出にくいようです。教員の板書もノートに丁寧に書いていますが、重要な点を絞りきれず、すべての情報を並列に書き写しているだけという学生もいます。効果的な方法が分からず、真面目だからこそ文章としてすべて覚えようとする傾向もあります。２年生になると、３年生で行う臨床実習や国家試験が現実味を帯びてきて、学習の取り組み方が変わっていきますが、１年生での学習をもっと効果的に行えればよいのにと感じています。

星子　卒業までの３年間で何を習得しなければならないのか、目指す職業には何が求められるのかをイメージできていないから、教員から与えられたものに一生懸命取り組んでいるのだと思います。そこで、私は、授業に卒業生を呼び、担当した患者の症例や施術、勤務形態や職場環境などについて話してもらうようにし、学生が言語聴覚士の仕事をイメージできるようにしています。卒業生は、学生にとって身近な存在です。卒業生に自身の職務経験を説明してもらうとともに、本校在学中にすべきことを話してもらうと、教員が同じ話をするよりも、学生の心に響くようです。

峰岡　卒業生に授業に来てもらう教員は多いですね。私はセミナー等で、プロのスポーツトレーナーを招き、仕事について話してもらいました。各科目の学習内容には関連があるのですが、学生は授業で学んだことを個別に受け止めてしまいがちです。実際の症例を聞くことで、授業での学びはすべてつながっていると、気づいてもらう機会としています。授業の関連性が理解できれば、学習意欲にもつながります。

また、「人間発達学」の授業では、卒業生に自分の子どもを連れてきてもらい、学生に子どもと触れ合う機会を設けています。今の学生は子どもと触れ合う機会がほとんどなく、学んだことを実感できないからです。

座談会にご参加いただいた先生方

校長代行	理学療法学科 リーダー	作業療法学科 リーダー	言語聴覚学科 副主任
原嶋克幸（はらしま・かつゆき）	**峰岡哲哉**（みねおか・てつや）	**老川良輔**（おいかわ・りょうすけ）	**星子隆裕**（ほしこ・たかひろ）
同校に勤務して 12 年目。	理学療法士。同校に勤務して 15 年目。担当科目は「運動学」「解剖学」等。	作業療法士。同校に勤務して 11 年目。担当科目は「身体障害作業療法学」等。	言語聴覚士。同校に勤務して９年目。担当科目は「聴覚系医学」等。

学生に感じている課題と指導の工夫②

人と接する仕事として 人間性を高める指導も重視

――仕事内容をイメージさせた上で、授業で学びを積み重ねることで、学習効果が上がるということですね。

峰岡　学生にとっては、資格取得が本校入学の最大の目標になりますが、資格取得はあくまでもその仕事に就くための入口です。本校が教育目標に掲げているように、臨床現場で活躍する力こそが重要です。

そこで私は、１年生の授業から、他者に対する配慮や思いやりの育成に重

きを置いています。例えば、学生同士で行うペアワークでも、相手を患者と想定して応対するように指導しています。患者がベッドに上がった後に患者が脱いだ靴をそろえる、患者の体に触れる前には必ずその内容を説明するといったことです。実際に施術をする際には、声のトーンや大きさ、言葉遣い、表情などへの気配りが必要です。３年生で臨床実習がありますが、普段していないことを、すぐにできるものではありません。１年生の時から、臨床現場を想定した経験を積ませるようにしています。

老川　私も、臨床現場を想定した指導を心がけています。作業療法士は、患者の生活に必要な行為（作業）が行えるよう支援するのが仕事です。つまり、食事やトイレなどの身の回りのことだけでなく、患者によって異なる仕事や役割、趣味や楽しみの行為（作業）がよりよく行えるよう支援します。患者の個別性を捉えた支援をするためには、その人自身を知ることが重要です。私が担当した症例を学生に話す際には、患者の生い立ちや家族構成、障害を負った背景など、その人をイメージできるようにし、なぜその介入をしたのか理解できるようにしています。

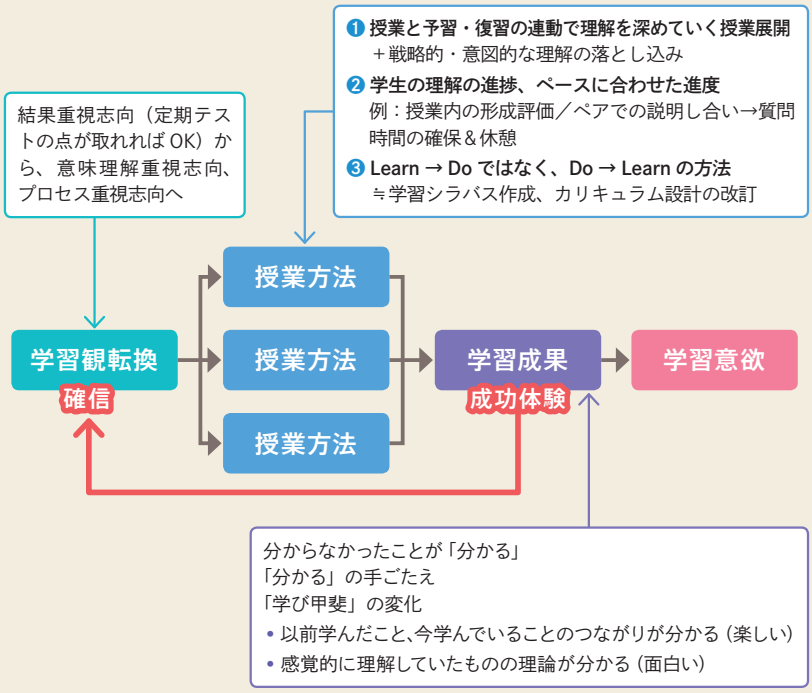
星子　私もお二人と同じです。言語聴覚士は目に見えないコミュニケーションを扱うため、例えば、聴覚障害者と接する際は、最初に「これくらいの声の大きさで聞こえますか」と、音の聞こえづらさを確認します。患者の状態を本人に確認する重要性を、学生にも常に伝えています。ただ、患者との距離の取り方は、学生自身に経験から学んでほしいと思っています。どのような接し方がよいのかは、患者によって様々だからです。

――人と接する職業であることを念頭に置いた指導を大切にされています。

老川　本校では、卒業後の就職先が医療や福祉関係などになります。患者の人生をより豊かにする支援が職務であり、資格を取得したその先に仕事としてすべきことを、学生が理解できるような指導を目指しています。

原嶋　実務を意識した指導は、麻生専門学校グループで力を入れています。2012年度からは、「グローバルシティズン・ベーシック教育」をグループ全校で行っています。「感謝と思いやり」「自立」「貢献志向」の３つを柱として、周囲への感謝と思いやりの心を持つことで社会人として自立し、さらに志を持って社会へ貢献していく人材の育成を目的としています。１年生を対象にした年間８コマ（合計720分）の授業で、全学科共通のプログラムです。担任が授業を担当するので、全校共通の研修を行うことで、授業の質を担保しています。

図１　学習効果の高い授業づくりのポイント［環境要因］



研究結果から見えた授業のポイント①

学生が授業の重要点を自らつかめるようプリントを工夫

――今回の学生へのインタビュー調査の結果を見ると、１年次での学習で、その職業に就く自覚を持って授業に臨むようになったり、科目間のつながりを意識しながら学習するようになったりと、学生自身、成長を感じており、先生方の授業の工夫が、学習効果を上げている様子がうかがえました。そのポイントを整理したのが、図１です。これをご覧になっていかがですか。

老川　学生の回答を見ると、私の意図が伝わっていて率直にうれしいです。①の「授業と予習・復習の連動で理解を深めていく授業展開」は、授業づくりでかなり意識している点です。様々な疾患と治療のアプローチ方法を学ぶ科目「身体障害作業療法学」を例にすると、疾患を説明するプレゼンテーションソフトのスライドは、すべての疾患で構成を統一しています。学生が、次に何の説明をされるのかの見通しを持ちやすく、復習の際にスムーズに理解できるようにしています。

峰岡　授業で理解した内容が、授業後

も学生の中に残っていることが重要だと考えています。私は、教員になった当初、シラバス通りに全部教えなければならないと考え、プレゼンテーションソフトを駆使して、教えたいことすべてを授業に詰め込んでいました。すると、学生から「先生の授業は、その時に理解できたと思っても、授業が終わると分からなくなっている」と言われ、学生が真に理解できる授業になっていないことに気づきました。そこで、授業を見直して、授業で扱う内容を焦点化し、さらに課題提示の仕方も工夫しました。授業の導入で学生の関心を引きつけ、私が教えたい知識を学生が調べる「課題」としたのです。例えば、肩関節についての指導では、「なぜ、肩はここまで上がるのかな？」と疑問を投げかけ、「筋肉はここまでしかついていないのに、なぜ上がるのか、調べてみよう」と課題を提示します。教員が全部説明すると、学生は理解した気になってしまうので、その点を改善しました。

「先生の授業は復習の時に分からなくなる」と、学生に言われ、授業を見直しました。

峰岡先生の授業づくりの工夫

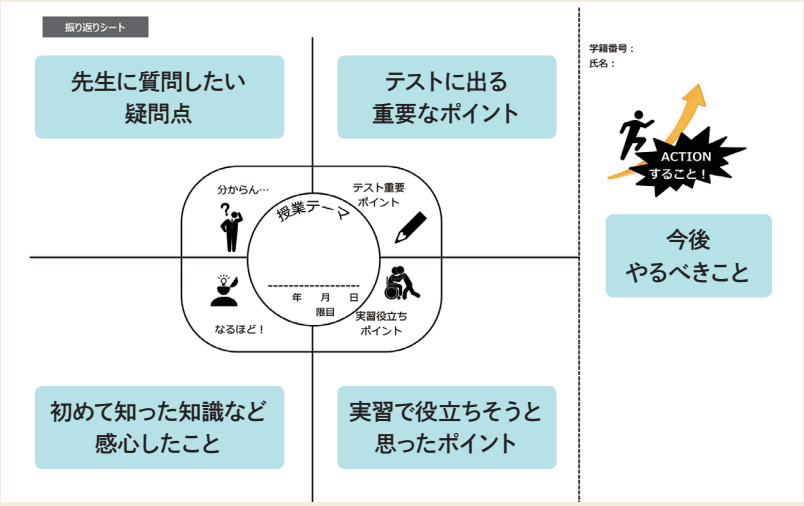
◎導入で学生の関心を引きつけ、「教えたいこと」を自分で調べる学習とする。
◎授業冒頭に小テストを行うことで、前時の復習を促す。
◎15分ごとに区切った授業展開で、集中力を持続させる。

症例の説明では患者の人生背景も伝えて、個別性の高い職務だと意識させています。

老川先生の授業づくりの工夫

◎授業のスライドの構成を統一し、学生の戸惑いをなくす。
◎学生が、自分の理解度に応じて要点を整理できる授業プリントを用意。
◎質問しやすいよう、ペアワークや休憩時間を設ける。

図2　老川先生の授業まとめプリント



Ａ４判の用紙に、５つの項目を記した授業プリント。学生は先生の話を聞きながら、それぞれの項目を書き込む。それを授業後に回収し、老川先生は主に「分からん…」の欄に書かれた内容にコメントをして学生に返却する。

――学生が学習内容を理解できるような、意図的な授業構成がポイントということですね。

峰岡　はい。そのために、スライドでの提示をやめて板書にしました。学生に配布する授業プリントの左半分は授業の要点、右半分は白紙とし、白紙の部分に授業で私が話した内容や板書を自分でまとめて書くようにさせています。そして、次の授業の冒頭で前時の小テストを行うようにしました。そうした授業展開にして、学生に能動的な学びを促しています。

老川　私も、授業プリントは、学生が授業の要点をまとめやすいように工夫しています（**図２**）。授業の内容を４つの要素に分けて書けるようにし、自分にとってのポイントがひと目で分かるようにしました。授業後にプリントを回収し、「分からん…」の欄に多く書かれていた内容は、次の授業でクラス全体に向けて説明しています。

星子　授業プリントは、学生の授業理解を支援する重要な教材です。私は、授業でモニターに映すスライドのプリントと、授業の要点を記したプリントの２種類を配布し、学生には自分が復習しやすい方に板書などを書き込むように指導しています。学生が回答したように、書き込みやすいプリントにしています。試験にノートなどの持ち込みはできませんが、「試験に持ち込みたくなるような１枚をつくろう」と伝え、授業の要点を意識させています。

また、１年生の前期では、書き込ん

だプリントを全員に提出してもらい、私が理解しやすいと思ったプリントを印刷して、学生に配布しています。1年生の最初に学習方法も学べるよう、他の学生のよい学習方法を手本にできるようにしています。

――それらの工夫は、学生に効果的なようです。インタビュー調査では、学生から「重要なポイントを授業内で自分なりに把握する力がついてきた」という声も挙がっていました。

研究結果から見えた授業のポイント②

学生の特性や状況に合った活動方法を選択する

――学生の理解に応じた授業の進め方では、どんな工夫をされていますか。

老川　授業冒頭の5～10分間を前時の学習内容を復習する時間とし、席が隣の学生同士で、プリントを基に問題を出し合わせています。不明点は説明し合ったり、資料を読んだりして解決し、それでも分からなければ、私に質問する形にしています。今の学生は、質問をしたくても、大勢の前だとなかなか言えないようです。少人数であれば「分からない」と言えるので、ペアワークとしました。あとは、授業の半ばに5分程度、休憩時間を設けるようにしています。90分間、集中力を保てるように気分転換をさせるためと、前半の授業での不明点を、私や友人に質問できる時間をつくるためです。

峰岡　私は、学習内容を15分ごとに区切って進めています。ずっと座ったままだと集中力が続かないので、ペアで学習内容を確認させたり、活動をさせたりして、体を動かす場を設けています。また、老川先生と同様に、学生の特性を考慮して、活動はペアワークの方が多いですね。声に出して言語化させて、自分が理解できているかメタ認知も促しています。

星子　学生に理解を促す工夫として、

学習方法をアドバイスした後は、成果があったかを聞き、必ずフォローしています。

星子先生の授業づくりの工夫

◎授業プリントは2種類用意し、自分なりの学習方法の確立を促す。
◎学生のよいプリントを共有し、学習方法の手本とさせる。
◎授業冒頭に小テストを行うことで、前時の復習を促す。

最初、プレゼンテーションソフトで図を見せながら説明していたのですが、私が図を描きながら説明する方法に切り換えました。臨床現場では、患者に治療方法などを説明する際、その場に既成の図がなければ、自分で描くしかありません。しかし、教科書などの図を見て、その通りに自分で描くのは難しいものがあります。そこで、私が図を描くところを見せ、それをまねできるようにしました。図を精密に描くことが目的ではなく、患者に見せることが目的だと、学生にも説明しています。

――今回のインタビュー調査では、知識の習得→経験という順序よりも、経験をしてから知識を習得するという学習の順序が、学習効果を高めていることが分かりました。その方法は、最初に先生方が挙げられていた卒業生に仕事内容を語ってもらうといった活動が該当します。

星子　話を聞くだけでなく、体験活動も授業に取り入れています。視覚障害や聴覚障害のある人が生活の中で何に困っているか、街には障害者に対応したどういった工夫があるかを、実際に街に出て調べさせています。授業の進め方は、まず視覚障害者と聴覚障害者を招いて、困っていることや改善してほしいことを聞いた上で、市役所や空港など、公共施設のバリアフリー対応をウェブサイトで調べて、実際に見に行くというものです。事前学習を丁寧に行うことで学習の動機づけがしっかりされているため、学生は街でたくさんの発見をしてきます。そしてそれが、次の学習の動機づけになっています。

――学生が理解できるよう、先生方が様々な工夫をさせていることが分かりました。インタビュー調査では、学生に自分に役立つと思えない授業のポイントも聞きました（図3）。それは、よい授業のポイントをそのまま反転させたものでもあると言えるでしょう。

図3　学生の成長に寄与しない授業の特徴

❶ 授業中の意図的な理解の落とし込みが不十分
→授業づくりの段階で、授業展開が練られているか？

❷ 教員主導の授業展開となっている
→学生の理解度・到達度を確認しながら授業を進めているか？

❸ 教科書を読むだけで、重要なポイントをつかめない
→学生が授業内容を整理しやすい展開としているか？

↓

教科書を終わらせることを目的とした授業
定期テストの得点を取らせるための授業

学生への学習方法の指導

自分に合った方法を選べるよう様々な学習方法を提示

――インタビュー調査では、自身の学習方法の工夫も聞きました。そのポイントをまとめたのが、図4です。

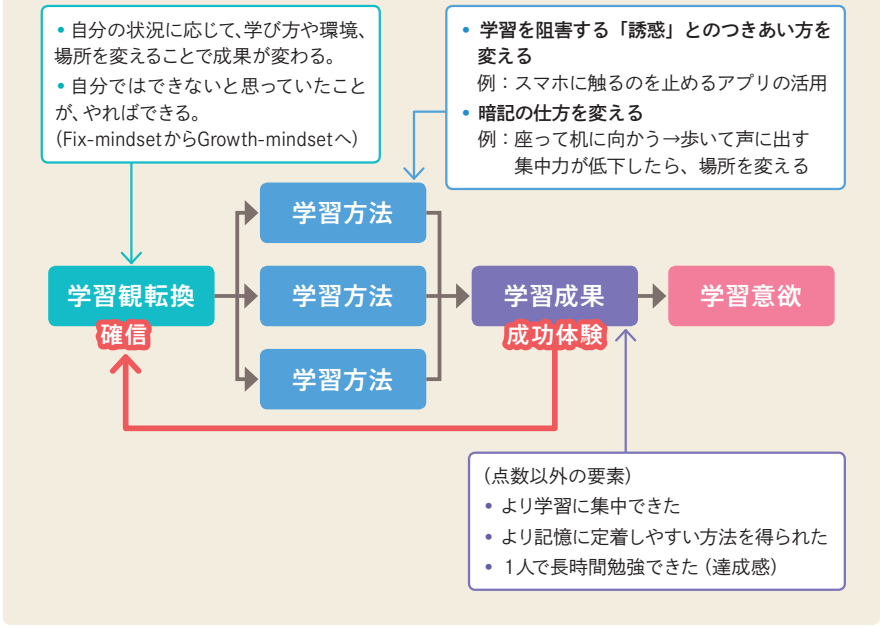
峰岡　今は学生が多様化し、学習支援ツールも様々にあるので、学生個別の指導が難しいです。

星子　卒業後は自分で学んでいかなければなりませんから、自分なりの学習方法を早く見つけてほしいですね。通学時間が長い学生は、板書をすべて撮影し、帰りの車内で見ながら復習しているそうです。教員ができるのは、学習方法の選択肢を提示することであり、そのためによい授業プリントを共有しています。また、学習方法をアドバイスした際には、その後効果があったのかを必ず聞くようにしています。

原嶋　週１回程度行われるホームルームは、担任の裁量で活動内容を決められます。そこで学生同士で学習方法を共有する活動も考えられます。

――学習方法を可視化し、提示することに意味があり、あとは学生が自分に合う、合わないで選べる環境にすることが大切と言えそうです。

図4　学習効果の高い学習方法の主なポイント［本人要因］



学校全体で教育力を高めるために

教員間で指導法を共有する場を定期的に設ける

――研究によって教員の指導や学生の学習方法の改善ポイントが明らかになりました。

原嶋　教員は、定期的に入れ替わりがあります。エビデンスと学生の声を結びつけながら、学生目線で学習効果があった授業のよさを本校の財産として蓄積し、教員間で共有できる仕組みをつくることが重要です。

本研究以外にも、本校では毎年２回、学生に授業アンケートを行っています。集計結果は、これまでは各学科の責任者と授業担当の教員のみに渡していましたが、今年度からは、全教員で共有することにしました。結果をオープンにすることに賛否両論ありましたが、教員個々の指導を比較するためではなく、学生にとってよい指導を教員間で学び合う文化を築くために、今後も継続していきたいと考えています。

峰岡　調査結果もアンケートの結果も、よい内容であれば、自身の指導法に自信を持てる機会になりますが、批判的な内容であれば、モチベーションの低下につながりかねません。アンケート結果と一緒に指導改善の方向性をフィードバックするなど、教員が前向きに受け止められるような工夫が必要です。

老川　私もそうですが、教員は、インターネットや書籍で、プレゼンテーションソフトの使い方などを独学していると思います。

峰岡　2020年度はカリキュラムを改訂予定です。新しいカリキュラムを機に、指導の共有化を進めるのもよいタイミングだと思います。日程調整が必要ですが、お互いの授業を見て、よい点を学ぶ方法も考えられます。

原嶋　週１回の教員会議では、国家試験対策や学生の情報とともに、指導法も共有する場にできればよいと考えています。教員の自助努力だけでなく、学校として指導改善を支援する方法を模索していきたいと思います。

教員同士がよい指導法を共有する学校文化を築いていきたい。

学校全体で指導力の向上を図るポイント

◎授業アンケートや調査結果を教員間で共有したり、授業を見合ったりして、よい指導を学ぶ。
◎教員同士が学び合う学校文化を築く。

■［資料］学生へのインタビュー調査の結果

「基礎力リサーチ」の２時点（４月、10 月）の結果を活用し、学習時間、学習意欲（学習方法や学習観）・授業満足度、成績の優先順位で、総合的変化（「伸び」や「低下」）を確認し、学生９名を抽出した。なお、アセスメント（アンケート）結果をそのまま活用すると、４月時点でのスコアが低い学生ほど伸び幅が大きく、スコアの高い学生ほど伸び幅が小さくなり、４月時点でのスコアが高い学生の変化が過小評価される傾向がある。そこで、「変化の出現率」を考慮したウエイトを設定し、重みづけを行った上で変化を確認し、インタビュー調査の対象となる学生を抽出した。

インタビュー調査では、学生目線で「伸び」につながった効果的な指導･学習方法について聞いた。学習方法が、何らかの「きっかけ」「動機」があって変容し、成績が向上すれば、それは学生にとって成功体験となる。変容させた学習方法に確信が持てるようになり、次の学習方法の変容を促すことにつながる。そうした学習観までを変えることが、学習習慣の改善、学習意欲の向上に必要であり、インタビュー調査でも、「きっかけ」「転機」となったことを、「環境要因」（授業・教員の働きかけ）と、「本人要因」（学習方法）に分けて情報を収集した。

インタビュー調査の結果（注目した回答を抜粋）

■質問項目

❶入学直前～現在に至るまでの自己の成長、学習・学習外のモチベーションの変化とその「転機」「きっかけ」
❷【環境要因】最も自分の「成長」につながったと感じる授業・指導、最も自分の成長につながらなかったと感じる授業・指導、１年生の学びは２年生の学びとどうつながっているか。
❸【本人要因】授業以外の学びや学び方（学習習慣）について、課題を克服するために自分なりに工夫したこと、あなたにとって一番学習に集中できる時間・場所、一番学びを誘惑するものは何であり、それとどのように付き合っているのか。
❹自分がやってよかったことで、後輩に勧めたいこと、自分はやらなかったが、後輩に勧めたいこと

■特に変容が見られた項目と内容

◎入学前～直後の意欲の上昇の要因
- 現役の先生が多く、臨床に近い内容を話してくれると思った。
- 入学前は学習の内容や計画のめども立てられず不安だったが、合格後、入学前教材で学習するうちに、先が見えてきて安心できた。
- クラスメートとはずっと一緒にいて、信頼関係にある。みんなが同じ方向を向いて学習し、教え合いながら乗り越えている。

◎入学してから２年生（７月末）までで、自分が最も「伸びた」「成長した」と感じていること
- 脳の障害についての授業で、解剖学の内容と関連があると気づいた。精神医学と心理学の関連性も同じであり、また、病理学を学んで生理学が少しずつ分かるようになってきた。学習内容が自分の中でつながり始め、学習の面白さを感じている。
- 知識だけでなく、作業療法士としての考え方が身についたと思う。入学前には、障害のある人に作業を通して手助けする職業だと思っていたが、入学後、先生方の話を聞き、どういった支援をするのかは、患者のそれまでの人生によるのだと分かった。また、身体機能の向上だけでなく、前向きな気持ちになり、周囲とのかかわりを増やしていくという、精神面での支援も重要だと分かった。
- １年生の時は、試験との関係ばかりを考えて勉強していたが、２年生になって臨床現場を意識するようになり、試験に関係なく、仕事に必要な知識を勉強しようという意識になった。
- １年生の時に、分からないながらも基礎をしっかり学習したので、２年生になって応用に生きていると感じる。病態や疾患についても、論理的に関連性を考えられるようになった。

［環境要因］
◎自分の成長につながったと感じる授業の特徴（P.3 図１）
- 最初の 10 分間が復習で、授業中も１つのまとまりが終わるごとに、理解度を隣の人と確認する時間がある。友人同士で教え合い、分からない箇所は先生に質問すればよく、理解がしやすい。

ユニットの内容を1枚のシートにまとめ、ユニット終了後に教員に提出する。同じ授業でも学生によってまとめ方は異なり、自分が復習しやすいよう工夫している。

- 自分で図を描きながら先生の話を書くと、理解が深まりやすい。
- 毎回、授業で重要ポイントを示してくれ、復習の際にそれをつなげると１つのことが明らかになるので、分かりやすい。
- 学生が調べ、図を描くなど、作業が多い授業は、自分で手を動かせるので、学習内容が身についた。
- 社会人のマナーとして、エレベーターの乗り方や目上の人との話し方などを教えてもらった。実習先で役立った。

◎自分の成長につながらなかったと感じる授業の特徴（P.5 図３）
- スライドに示された情報のうち、どれが大事かが分かりにくい。
- 板書が少なく、教科書を読むだけで、授業についていけない。
- 定期試験対策のプリントができたら、それで満足してしまう。単位修得にはそれでよいが、自分で学習し直さないといけない。
- 配布資料と関係のない話をされて、戸惑うことがある。
- 先生の話に学生の理解が追いついていない。先生は簡単と思っていても、学生には難しいこともある。

[本人要因]
◎学び方で自分なりに工夫したこと（P.6 図４）
- 授業で聞き逃したことや理解できなかったことの多い科目は、友人に教えてもらいながら学習するようにしている。
- 授業プリントがある場合は、それに直接書き込み、すべての授業が終わった後に、復習しながらノートにまとめ直している。
- 重い教科書では、確認すべき箇所を画像化しておく。重要ポイントは付箋に書いて貼るが、文字が真っ直ぐ書けるよう、無地の付箋ではなく、罫線付きの付箋を使う。
- 机に座ってやるよりも覚えやすいので、歩きながら暗記事項を口に出しながら覚えている。
- 動画を見すぎないよう、スマートフォンを遠くに置くようにしている。図書館では、バッグにしまってロッカーに置いておく。
- スマートフォンを触らないためのアプリを活用している。

研修ワークシート

記事を読んで、ご自身の指導を振り返り、以下の内容を書き込んでみましょう。

■あなたが担当している授業において、「現場で活躍する」ために学生が身につけなければならない力は、どのような力ですか。

専門分野で必要とされる力など、思いつく限り挙げてみましょう。

■あなたが行っている授業を通じて、学生に育成している「現場で活躍する」ための力とは、どのような力ですか。

■あなたがこれまで行った授業の中で、最も効果があったと感じた（手ごたえのあった）授業は、どのような授業でしたか。

その授業を行った時期、授業の内容や課題、方法など、思い出せる限り、書いてみましょう。

■その授業が最も効果があった（手ごたえがあった）のは、どんな要因があったからだと思いますか。

ご自身の考えを、できるだけ具体的に書いてみましょう。